様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｈ０２３０４

研究課題名（和文）越境文化演劇研究――異他の視点からの演劇文化論

研究課題名（英文）Research on Transcultural Theatre: From the Perspective of the Alien

研究代表者
平田　栄一朗（Eiichiro, Hirata）

慶應義塾大学・文学部（三田）・教授

研究者番号：００２８６６００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　8,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究（越境文化演劇研究）の３名の研究者は、３年間の期間において３回の国際シンポジウム、10回の講演会とワークショップを開催し、国内外の学会にて６回発表を行った。自文化と異文化を明確に分ける従来の研究と異なり、本研究はベルンハルト・ヴァルデンフェルスの文化論を継承して、私たちが自文化の中にある「異他性(das Fremde)」の実態を多角度から見つめることで、自文化と異文化に対する私たちの意識を広げ、同時により繊細にする可能性を模索した。この可能性の模索には、日常から一歩を引いた次元の芸術体験が有効であるが、その有効さの多様性をヨーロッパ、アフリカ、東アジアの研究者との議論によって確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年、世界の多くの国々で、地域・伝統文化を重んじる「文化的アイデンティティ」の傾向が高まっている。文化的アイデンティティは、地域や国がその統一性をアピールするのに役立つ一方、同一文化内における個の多様性が軽視されたり、異文化を自文化と明確に異なるものとして強調することで、排外主義を助長しうる。本研究は異質性を異文化だけでなく、自文化にも見出して、自文化の自明性を問い直すことで、自文化と異文化の複雑な関係性への繊細な見方を可能にする。その見方は、文化が一般的に考えられる以上に多様であることを私たちに気づかせ、その多様性こそが私たちの個性を尊重する真の多元文化社会を促進すると考えられる。

研究成果の概要（英文）： The members of the three-year-JSPS Research Project “Transcultural Theatre” organized three international symposiums and ten workshops with theatre and dance researchers, opera directors, choreographers from East Asia, Europe and Africa. The research members presented the papers on cultural issues and theatre at the conferences of Japanese Society of Theatre Studies, International Brecht Society and Academy of Arts Berlin.
The project based on the cultural theory of the philosopher Bernhard Waldenfels, investigated art and theatre works which confront the audiences with the strangeness in their own culture. Strangeness derives not only from other cultures but also from their own. Art and theatre works enable the audiences to experience and reflect the strangeness of their own in specifically playful ways. These experiences can lead us to having wider and more flexible visions to their relationship to other cultures as well as to strange aspects of their own.

研究分野：演劇研究

キーワード：文化研究　演劇研究　オペラ研究　文学研究

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

世界の演劇研究における演劇文化論は「相互文化的（intercultural）」な研究から越境文化論に移行しつつある。1990 年代にパトリス・パヴィス（フランス）やエリカ・フィッシャー＝リヒテ（ドイツ）らによって提唱された相互文化論は、各地域の演劇と文化を相互に理解し合うという点で意義があったが、このような各演劇文化の相互理解だけでは不十分であるという批判が、ジョゼット・フェラル（カナダ）やギュンター・ヘーグ（ドイツ）に代表される越境文化論者によって行われ始めた。彼らの論点と批判は次の通りである。相互文化論は、例えば植民地支配下にあったアフリカや中近東に独自の演劇文化があり、その特徴を正しく理解するには意義があった。しかしこの論は、これらの文化地域がその地域内の別の文化、あるいは周辺のマイノリティ文化と緊張関係にもある以上、「自己」の文化を主張すればするほど、内部の異なる文化や周辺の文化との軋轢をもたらしてしまう。他方、世界の多くの地域の演劇は、いまだ経済的・政治的な制約にあるため、先進国の演劇にとって当然とみなされる「国際的」な交流や議論ができない状況にある。この格差が大きいなかで、「相互文化的」な交流を演劇研究で進めても、その成果は先進国側の研究に益することになり、文化間の格差がかえって広がるという批判が、ジャクリーヌ・ロウ（オーストラリア）によって行われた。

このような相互文化論の限界を踏まえて、ヘーグは2015 年に発表したドイツ語の論文「越境文化演劇」において、「異他」(ドイツの哲学者ベルンハルト・ヴァルデンフェルスの概念”das Fremde”）と思われるものが外部ではなく、自分たちの文化的自明性の中にあることに気づかせる舞台作品を探究することで、自文化と異文化の境界線を問い直す意義を主張した。この境界線の問い直しにより、私たちが当然と思いがちな「文化的アイデンティティ」を見つめ直し、その反省的態度を踏まえて「異文化」とされる演劇を捉え直すことができる。研究代表者は過去3 年、代表者の拠点である慶應義塾大学とライプツィヒ大学で行ったギュンター・ヘーグとの学術交流において、「越境文化論」が日本演劇にどのように応用可能であるかについて議論を重ねてきた。とりわけ日本の演劇文化の一つ、能楽における異質な要素を調査し、その成果をインスブルック大学や上海・同済大学の国際会議で発表してきた。

２．研究の目的

越境演劇の演劇研究はごく僅かな研究者によって個別に始められたばかりであり、解明すべき重要な課題がいくつか残されている。それは次のようなものである。

――演劇（文化）に特有の異他の特徴はどのようなものであるか。そしてそれが文化の議論に対してどのような意義をもたらすのか。

――日本の文化と演劇においても「異端」を登場人物や伝説の人物として好む傾向があるが、この異端が、ヘーグやヴァルデンフェルスの言う、自文化を問い直す「異他」とどのように関係しているのか。丸山眞男が指摘したように、「異端好み」の傾向を安易に日本文化と特徴付けるだけでは、かえって異端に本来的に備わる特徴が中和されてしまう。能や歌舞伎、文楽などに登場する鬼や異端な人物には、自文化に対するどのような問題提起が暗示されているのか。

――他のアジアの国々やアフリカにおいても、舞台芸術が異他のモチーフによって文化を問い直す試みは行われているが、それらにどのような特色があるのか。

本研究は、これらの問いを国内外の研究者や演劇実践者とのシンポジウム・ワークショッ

プを通じて議論し、考察した。また演劇と文化に関連する国内外の重要な文献を議論する研究会を定期的に設けて、カルチュラル・スタディーズや文化研究の見地と、演劇学が行っている文化の考察に関する見解の関連性を見極める考え方を得られるように努めた。

３．研究の方法

本研究は以下の２つの領域で共同研究を進めた。一つ目は、海外の研究者と芸術家を招聘して、自己文化内の異他の国際研究：自己文化の異他の事例を世界の各地域の演劇研究者に探究してもらい、それについて議論し、研究の目的で記した問いへの答えを見定めていく方法である。越境文化と演劇を研究しているライプツィヒ大学所属の研究メンバーを中心にして、ヨーロッパ、アジア、アフリカの研究者・芸術家を、研究代表者が所属する慶應義塾大学に招聘してシンポジウムとワークショップを開催した。演劇と文化に関するテーマをあらかじめ決めて、それと関係する舞台作品を招待者に選んでもらい、それらの作品にみられる自文化の異質性とそこから見出される文化の意義・可能性について参加者とともに議論した。その際、共同研究者の北川千香子（慶應義塾大学商学部准教授）と針貝真理子（東京藝術大学音楽学部准教授）がオペラ・音楽劇・舞踊や、東欧の演劇文化に関するシンポジウム・ワークショップの企画を立案した。

二つ目は、カルチュラル・スタディーズなどの文化論、メディア研究、社会論などの理論的な領域において本研究が目指す越境文化の考え方がどのように議論されているかを確認するために、定期的に研究会を開催して、本研究に関わった９名の研究者とともに、文化の異質性がどのように議論され、位置付けられているかを確認する作業を行った。例えばカルチュラル・スタディーズなどの文化論において文化的アイデンティティが批判的に検証されているが、その批判がどこまで妥当であるか、あるいは文化的アイデンティティの問題が、反移民や反ＥＵを標榜するヨーロッパの右翼運動の考えにどのように反映されているかなどを考察・議論した。

４．研究成果

本研究の成果は４つの方法によって発表し、また、さらなる発表の準備を進めている。第一に本研究の３名のメンバーは、日本演劇学会、国際ブレヒト学会、ベルリン芸術アカデミーなどの国内外の研究組織にて越境文化に関する研究発表やパネルセッション開催を行い、本研究で行った成果を発表した。第二に、ヨーロッパ、アジア、アフリカの研究者と芸術家を研究拠点に招聘し、シンポジウム・ワークショップを通じて、演劇と文化に関する国際的な議論を公開し、国内外からの参加者と意見交換する機会を設けた。ここでは本研究が主催した国際シンポジウムのテーマと外国からの招聘者を紹介する。

- シンポジウム「自己のなかの異他――芸術、文学、演劇を例に」　招聘者：ヴェロニカ・ダリアン（ライピツィヒ大学准教授）、ミヒャ・ブラウン（ライプツィヒ大学演劇研究センター主任）、ジャンヌ・ビンダーナーゲル（博士、ハレ歌劇場文芸部員）２０１８年１月２７日
- シンポジウム「主体化のパラドックス――文化の視点から」　招聘者：ゲラルト・ジークムント（ギーセン大学教授）、エーファ・ホリンク（ギーセン大学講師）　２０１９年１月２６日
- シンポジウム「越境文化演劇における感情の諸相」　招聘者：コク・G・ノノア（ルクセンブルク大学ポスドク研究員）

第三に、本研究で行った研究成果を、論文集『文化を問い直す――舞台芸術の視座から』にまとめて2020年度中の発表を目指している。私たちが「これは自明である」という文化的な意識を問い直す国内外の舞台作品、オペラ、文学作品などを考察し、自明性を問い直す芸術作品の試みを現代社会における重要な文化的活動と位置付けて、その意義を発表する。執筆者と論文タイトルは次の通りである。

- 平田栄一朗：文化を問い直す意義――文化・アイデンティティ・自由の再検討と舞台芸術
- 北川千香子：「Volksoper（民衆オペラ）」の理念と実践シュリンゲンジーフの《さまよえるオランダ人》演出を例として
- 針貝真理子：罅割れる憧憬――クリストフ・マルターラー演出『美しき水車小屋の娘』における歌う主体の複数化と文化的アイデンティティ″
- 三宅舞：定着しないフィクションのすすめ――岡田利規『God Bless Baseball』における異他的なフィクションとしてのリズム″
- 寺尾恵仁：異物としての演劇言語――演出家・鈴木忠志の国際共同制作
- 石見舟：今ここからずれる風景――ハイナー・ミュラー『ハムレットマシーン』を例に
- 宮下寛司：舞踏を動かし続ける舞踊
- 栗田くり菜：型破りの笑い――セルダー・ソムンジュの『我が闘争』朗読パフォーマンス
- 谷本知沙：読むことにおける越境――多和田葉子「Die 逃走 des 月 s」を例に

本研究の成果が上記の論文集として出版されることで、次の二点において文化研究に意義をもたらすと考えている。１．芸術作品を媒介にして私たちの文化的意識を再検証することで、従来の文化研究が主として日常世界や歴史を対象にして行ってきた文化的意識への批判的検証を、より広い文脈で行うことができる。日常から一歩引いた作品世界の「かのような(as if)」状況に照らし合わせて現実世界を考察すれば、「世界が仮に…であれば」という仮説を、従来の文化論よりも広い視野で議論することができる。自己を日常から一歩引いて芸術の世界を鑑賞する状況は、個人が自分の文化的バックボーンである文化的アイデンティティからも距離を置くことでもある。芸術作品の鑑賞者はこの距離を出発点として、自分の価値観を知らずして規定する文化的自明性を、多角度から自由に見つめ直すことができる。２．国内外で芸術の自由が脅かされる昨今、本研究が芸術の立場から文化を再検証することで、芸術の意義を軽視する文化的風潮の要因をより切実な見方から解明することが可能になる。芸術の自由が必要以上に脅かされる文化的風潮は――間接的な効果ではあるが――多様な人々が多様に生きる自由を狭める社会的傾向を助長しうる。芸術作品が自文化の自明性に向けて行う問い掛けを、学問研究が真剣に受け止めて議論・解釈することは、個々人が自己に本来備わる可能性と自由を無自覚なままみずから狭めて、生活世界と社会に閉塞感を招く悪循環の傾向に一石を投じることができる。

第四に、越境文化と演劇に関する研究書”Das Transkulturelle Theater”（ギュンター・ヘーグ著、２０１７年)を翻訳出版し、本研究の成果が国際的な演劇研究の中でどのように位置づけられるかを公表する。現在、本研究メンバーが中心になって同書を翻訳するプロジェクトを行っており、２０２１年中に翻訳出版を目指している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　5件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Eiichiro Hirata (Markus Wessendorf, Guenter Heeg, Micha Braun)	４．巻 45
２．論文標題 The Strange Name and Ambiguous Gestures of a Japanese Brechtian in the Social Combustion of Prewar Tokyo	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Brecht Year Book	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Eiichiro Hirata　(Veronika Darian, Peer de Smit)	４．巻 -
２．論文標題 Das japanische Koerpertheater und die Geste des dekonstruktiven Diskurses	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Veronika Darian, Peer de Smit: Gestische Forschung. Praktiken und Perspektiven	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 平田　栄一朗	４．巻 -
２．論文標題 メディアとしての受容身体――主体のずれた（自己）認識と取り残された身体について	５．発行年 2020年
３．雑誌名 宇沢美子編著『メディアとしての身体』	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Chikako Kitagawa	４．巻 -
２．論文標題 Schlingensief und Oper	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Metzler Lexikon Schlingensief	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 平田栄一朗 (ed: Guenther Heeg)	4．巻 -
2．論文標題 Zur "Schattendramaturgie" bei Brecht und im traditionellen japanischen Theater	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Recycling Brecht. Materialwert, Nachleben, Ueberleben	6．最初と最後の頁 167-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 平田栄一朗 (eds: Koku Nonoa, Theresa Kovacs)	4．巻 -
2．論文標題 No als transkulturelles Theater	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Eine transdisziplinaere Annaeherung	6．最初と最後の頁 117-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 針貝真理子	4．巻 67
2．論文標題 ベルギー・フランデレン文化圏から見る「ポストドラマ演劇」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本演劇学会紀要『演劇学論集』	6．最初と最後の頁 9-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 針貝真理子　(ed: Thomas Pekar)	4．巻 -
2．論文標題 Ort der Gespenster Klaenge und Stimmen in Time's Journey Through a Room von Okada Toshiki	5．発行年 2018年
3．雑誌名 WOHNEN UND UNTERWEGSSEIN	6．最初と最後の頁 91-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 北川千香子	4．巻 67
2．論文標題 オペラにおける「ポストドラマ性」 ――シュリンゲンジーフの《パルジファル》演出を例として――	5．発行年 2019年
3．雑誌名 日本演劇学会紀要『演劇学論集』	6．最初と最後の頁 31-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 平田栄一朗	4．巻 56
2．論文標題 「残余」としての演劇――ブレヒト作『ファッツァー』を例に	5．発行年 2018年
3．雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要「ドイツ語学・文学」	6．最初と最後の頁 13-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 針貝真理子	4．巻 156
2．論文標題 都市の声，餌食の場所― ルネ・ポレシュ『餌食としての都市』における〈非場所〉の演劇	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ドイツ文学	6．最初と最後の頁 192-207
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　4件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 Eiichiro Hirata
2．発表標題 he Strange Name and Ambiguous Gestures of a Japanese Brechtian in the Social Combustion of Prewar Tokyo
3．学会等名 16th Symposium at International Brecht Society（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Eiichiro Hirata
２．発表標題 Postdramatic Theatre with another historical sight
３．学会等名 Akademie der Kuenste Berlin（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Mariko Harigai
２．発表標題 Brecht zum Verkauf! Verfremdung musikalischen "Rauschgifts"; in Brecht Seller von Chiten
３．学会等名 International Brecht Society（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Chikako Kitagawa
２．発表標題 Transformation des "Gesamtkunstwerks"; Am Beispiel von Christoph Schlingendes Inszenierung des fliegenden Hollaenders
３．学会等名 Asiatische Germanistentagung (AGT) 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Chikako Kitagawa
２．発表標題 Gefrorene Emotion: Anmerkungen zu Sciarrinos Musiktheater Da gelo a gelo
３．学会等名 Symposium: Facetten der Gefuehle im Transkulturellen Theater
４．発表年 2020年

１．発表者名 平田栄一朗
２．発表標題 文化を問う演劇
３．学会等名 日本演劇学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 針貝真理子
２．発表標題 アイデンティティ越境装置としての演劇　地点『忘れる日本人』を例に
３．学会等名 日本演劇学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 北川千香子
２．発表標題 バイロイトに未来は、有りや、無しや？
３．学会等名 日本ワーグナー協会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 平田栄一朗
２．発表標題 演劇学と文学研究の紐帯――ドイツ演劇学を例として
３．学会等名 日本アメリカ文学会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 平田栄一朗
２．発表標題 脱措定的な差異としてのポストドラマ演劇
３．学会等名 日本演劇学会西洋比較演劇研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 針貝真理子
２．発表標題 ベルギー・フランデレン文化圏における(ポストドラマ演劇：ニードカンパニー『ロブスターショップ』における封じられた声の演出を例に
３．学会等名 日本演劇学会西洋比較演劇研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 北川千香子
２．発表標題 『待つ』ことにおける時間の美的構造　―　リヒャルト・ワーグナー《トリスタンとイゾルデ》を例として
３．学会等名 日本独文学会秋季研究発表会
４．発表年 2017年

１．発表者名 北川千香子
２．発表標題 近年の《ばらの騎士》演出　―　リチャード・ジョーンズの演出を中心に
３．学会等名 日本リヒャルト・シュトラウス協会第172回例会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 北川千香子
２．発表標題 オペラにおけるポストドラマ演劇　―　クリストフ・シュリンゲンジーフの《パルジファル》演出（2004）を例として
３．学会等名 日本演劇学会西洋比較演劇研究会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 西洋比較演劇研究会　山下純照（編）　北川千香子他	４．発行年 2019年
２．出版社 月曜社	５．総ページ数 608
３．書名 『西洋演劇論アンソロジー』	

１．著者名 Mariko Harigai	４．発行年 2018年
２．出版社 transkript, Germany	５．総ページ数 298
３．書名 Ortlose Stimmen Theaterinszenierungen von Masataka Matsuda, Robert Wilson, Jossi Wieler und Jan Lauwers	

〔産業財産権〕

〔その他〕

講演会：ラルフ・シュネル氏（ジーゲン大学名誉教授）： ハイナー・ミュラーの革命劇『指令』
http://web.flet.keio.ac.jp/~hirata/activities/Schnell_2018.html
演劇学会パネル発表「文化を問い直す演劇」　2018年6月30日　開催校：神戸松蔭女子学院大学
http://web.flet.keio.ac.jp/~hirata/activities/Kongress_2018_Kobe.html
講演会：バーバラ・グローナウ氏、アダム・シチラク氏：アクション芸術における政治的なものの形態
http://web.flet.keio.ac.jp/~hirata/activities.html
科研シンポジウム：主体化のパラドックス――文化の視点から――
http://web.flet.keio.ac.jp/~hirata/activities.html
講演会：アンドレア・ヘンゼル：未知なる時空間の芸術的変容 カール・フリードリヒ・シンケルの紀行文
http://web.flet.keio.ac.jp/~hirata/activities/Hensel_2017.html
ワークショップ：ミヒャエル・フォン・ツア・ミューレン氏ワークショップ：新たなブレヒト・オペラ？
http://web.flet.keio.ac.jp/~hirata/activities/v_z_Muehlen_2018.html
シンポジウム： 自己のなかの異他――芸術、文学、演劇を例に
http://web.flet.keio.ac.jp/~hirata/activities/Fremde_im_Eigenen_2018.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	針貝　真理子 (Harigai Mariko) (00793241)	東京藝術大学・音楽学部・准教授 (12606)	
研究分担者	北川　千香子 (Kitagawa Chikako) (40768537)	慶應義塾大学・商学部（日吉）・准教授 (32612)	